

「アメリカ空間形成史と都鄙思想の変遷からみる現代大都市の誕生」

目次構成

第1章 本研究について

- 1-1. 研究動機
- 1-2. 研究目的
- 1-3. 研究方法
- 1-4. 既往研究
- 1-5. 巻末資料について

第2章 宗教と民主主義のフロンティア

- 2-1. はじめに
- 2-2. ピューリタンのニューヘイブン植民都市
 - 2-2-1. ピューリタン概要
 - 2-2-2. ジョン・ダヴェンポート牧師の試み
 - 2-2-3. ニューヘイブン植民都市の空間
 - 2-2-4. まとめ
- 2-3. クェーカー教のフィラデルフィア植民都市
 - 2-3-1. クェーカー教概要
 - 2-3-2. ウィリアム・ペンの試み
 - 2-3-3. フィラデルフィア植民都市の空間
 - 2-3-4. まとめ
- 2-4. シェーカー教 信仰と機能の共存
 - 2-3-1. シェーカー教概要
 - 2-3-2. シェーカー教コミュニティにおける試み
 - 2-3-3. シェーカー教コミュニティの空間
 - 2-3-4. まとめ
- 2-5. 建設行為の体系化と「平等思想」による空間の単一化
 - 2-5-1. 概観：アメリカ住宅史
 - 2-5-2. 〈建築家〉の体系化と〈建築者〉によるアマチュア建設
 - 2-5-3. 民主主義による「平等思想」
- 2-6. 小結

第3章 ユートピア思想と産業革命

- 3-1. はじめに
- 3-2. 空想的社会主義：実践的ユートピア思想
 - 3-2-1. オーウェン主義工業都市
 - 3-2-2. フーリエ主義アソシエーション
 - 3-2-3. ベラミーのナショナリズム『顧みれば』
- 3-3. アメリカ産業革命
 - 3-3-1. 第一次産業革命
 - 3-3-2. ニューヨーク万国産業博覧会
 - 3-3-3. 南北戦争による国民経済の確立
 - 3-3-4. 第二次産業革命
- 3-4. シカゴ コロンブス万国博覧会
 - 3-4-1. コロンブス万国博覧会の背景と概要
 - 3-4-2. ホワイト・シティのアメリカ精神への影響
 - 3-4-3. ホワイト・シティの空間形成への影響
- 3-5. 小結

第4章 世界都市〈コスモポリス〉の誕生

- 4-1. はじめに
- 4-2. 新たな都市空間の実験
 - 4-2-1. コニーアイランドとマンハッタン
 - 4-2-2. ホワイト・シティとシカゴ
 - 4-2-3. 植民都市とフィラデルフィア
- 4-3. グリッドという空間の枷
 - 4-3-1. アメリカ開拓史におけるグリッド式地割の歴史
 - 4-3-2. グリッドによる建築的〈フロンティア〉の消滅と土地の創造
- 4-4. コスモポリスの誕生
 - 4-4-1. 摩天楼によるスカイラインの形成
 - 4-4-2. メトロポリスの誕生、そしてコスモポリスへ
- 4-5. 小結

第5章 考察：《神権＝民主＝寡頭》アメリカ史における空間形成様式

- 5-1. はじめに
- 5-2. 帝国と米国：連邦主義と草の根民主主義の精神
- 5-3. テンニースの純粹社会学から説くアメリカの精神と社会の枠組み
- 5-4. 独立戦争・南北戦争・世界大戦の戦間期におけるアメリカ
- 5-5. 《神権＝民主＝寡頭》
- 5-6. 小結 新世界より、旧世界へ

第6章 結論

結論

中谷研究室 the Believers ゼミ
作成：吉川大輔
2/4/2020

第1章 本研究について

・研究目的

本研究では、現代の世界に分布する大都市空間がアメリカ発祥のものであるとし、この発展を可能にしたアメリカ特有の空間形成の過程を、精神や政治理念、経済および社会システム、建築様式といった思想史の観点から明らかにする。理想を求めて開拓されたアメリカという空間において、大都市の発展が当国特有の思想の変化に裏付けられているということ、そしてその「アメリカらしさ」とは如何なるものであったのかを明示することを本研究の目的とする。

・研究方法

(1) 植民地としての開拓行為や新国家としてのアメリカの「横」の拡大が、どのような思想のもとに行われたのか、また、このフロンティアの拡大がアメリカの空間にどのような影響を及ぼしたのかをプロテスタントの信条や農本主義を軸に分析する。（第2章）

(2) 南北戦争へと向かう時代から戦後の第二次産業革命を経た工業主義的な思想が、「縦」の拡大である大都市の菌糸体とも言える環境を形成した過程を、19世紀のユートピア思想と産業革命を通して分析する。（第3章）

(3) アメリカの大都市であるニューヨーク・シカゴ・フィラデルフィアを中心に扱い、第2章と第3章で分析した空間を土台として発芽した摩天楼が聳える大都市空間へと成長した過程をまとめる。（第4章）

(4) 以上の、アメリカ史における空間形成に伴った思想の変化と大都市の発展過程を比較することで、アメリカ特有の空間を生んだ要因の実態を明らかにし、この大都市空間が世界へと伝播することができた理由を考察する。（第5章）

・既往研究

アメリカ都市の発展過程を対象とした既往研究は数多く存在するが、政治経済やユートピア思想にまで範囲を広げ、フロンティアの拡大と都市の発展を関連づけて考察したものは少ない。以下は、ユートピア思想とアメリカの都市や建築の発展を結びつけた主な研究である。

●長谷川章「アメリカ田園都市とピューリタニズム 一千年王国思想からテクノロジカル・ユートピアへ」（2018, 東京造形大学研究報 19）

●入子文子『アメリカの理想都市』（2006, 関西大学出版部）

● Lewis, Michael『City of Refuge: Separatists and Utopian Town Planning』（2016, Princeton University Press）

● Abbott, Carl「Frontiers and Sections: Cities and Regions in American Growth」（1985, The Johns Hopkins University Press）

第2章 宗教と民主主義のフロンティア

2-1. ピューリタンのニューヘイブン植民都市

既往研究でも述べられているように、ピューリタンが「民数記」に記されている正方形の宿営地を模して都市の計画を行ったことは明らかであった。しかし、それだけでなく、正方形の中心を取り巻く「郊外」の区画にも神聖な意味があり、そこへ好んで住む者がいた理由も推測できた。結果として、ニューヘイブン植民都市の空間形成には、植民地時代に必須であったと思われる、必要最低限の居住空間を構築し開拓行為の拠点とするという目的ではなく、最初から、彼らの宗教が理想とする空間を完全に構築することを目指したことがわかった。

2-3. クェーカー教のフィラデルフィア植民都市

フィラデルフィアは、一見世俗的な目的を果たすために繁栄したとも思える空間でありながらも、その計画にはクェーカー教が理想とした宗教的な裏付けが存在したことが確認できた。クェーカー教には、政治経済的にも中心となる空間を形成する目的があったと同時に、それらが宗教的な理想空間の条件と一致したのだと言える。科学の追求を推奨したクェーカー教であったため、フィラデルフィアの建設は科学的な試みであったという主張も多くあるが、ウィリアム・ペンによる空間形成は、崇拝と神聖な導きの元に行われたクェーカー教のための試みであった。

2-4. シェーカー教 信仰と機能の共存

シェーカー教は、理想とした秩序のある整然とした空間をコミュニティにおいて実現させ、そこを訪れた外部の人間にも彼らの信条が伝わるような計画と整備を行った。この、外部へと発信するというシェーカー教の目論見は、彼らの配置計画からコミュニティ内での活動や運営を通して一貫されている。さらに、シェーカー教の類稀なる繁栄は、彼らのコミュニティ空間に包含された矛盾にあることが明らかになった。彼らのコミュニティは、宗教的な共同体であると同時に、機能重視の都市的な社会でもあった。これは、独立前に見られた「農村」から、新国家として発展した「都市」が垣間見える過渡期を象徴する空間である。

2-5. 建設行為の体系化と「平等思想」による空間の単一化

17世紀から19世紀中期にかけて、アメリカの国民的な建築様式が徐々に単一化して行ったことから、アメリカの空間が統一感を帯び始めたと言える。この住空間の単一化の原因として、「建築家」という職業の組織化と、個人での住居建設を可能にした「パターンブック」の流布によって似通った空間が田園の各地で形成されたことを分析した。また、このような単一化が可能になったことはジェファーソンおよびジャクソン流民主主義に由来する。19世紀前半に掲げられた農本主義は田園の農民の勢力を増し、平等主義は人々の環境の平等化を促したことが明らかになった。

2-6. 小結

本章では、植民地時代の都市空間と、19世紀中期までに見られた住空間における形成過程をまとめた。植民都市では、植民地として生存のための諸条件や政治経済的な目論見も存在したが、根底には宗教的な信仰が存在し、その空間形成に大きな影響を与えた。また、アメリカ合衆国が独立した後も、シェーカー教によるコミュニティでは、植民都市と同様に宗教による空間形成が見られたが、新国家として必要であった経済的な発展も重視されていた。シェーカー教の村は、植民地時代のように宗教中心であった社会から、産業中心である社会との過渡期を象徴するものである。また、住空間も宗教から農本思想へと社会の本流が変わる時代を顕著に反映しており、ジェファーソンやジャクソンの民主党が主権を握り、農本主義や平等主義を唱えたことに応えるように住空間は単一化され、農夫が自分で建てるコテージ様式の住居がアメリカ全土の田園を彩ったとこで、この空間様式は普遍化したのである。

第3章 ユートピア思想と産業革命

3-1. 空想的社会主義：実践的ユートピア思想

ここでは、19世紀のアメリカに顕著な影響を与えたとされる3つのユートピア思想から、当時のアメリカ社会の性質を分析する。

■オーウェン主義工業都市

ロバート・オーウェンの思想

オーウェンは、産業革命が資本家と労働者、都市と田園、男と女といった社会の差異を広げていることから、諸悪の根源であるとした。しかし、工業の発展自体に反対していた訳ではなく、不合理的で不道徳な方法で行われていることのみを批判し、産業の発展は進歩の媒体であるとした。オーウェンはこれらの思想をニューラナークで実践として試行するとともに洗練し、常に更新していった。

オーウェンの試みからみるアメリカの精神

オーウェンの思想は徹底して世俗的であったが、千年王国思想を比喩として用いたことや、既存の宗教や概念を否定し、新たな思考の自由を強く提唱したことが、ジェファーソンが起草した「バージニア信教自由法」と類似していたため、当時のアメリカ精神と合致したと思われる。さらに、巨大農園の経営者と労働者による社会階級の対立によって不満を募らせ始めたアメリカ人は、工場の所有者というブルジョワでありながら階級差を払拭しようとしたオーウェンの試みに共感した。当時のアメリカでは、植民地時代から続く宗教の影響を根底に据えた農本主義の社会を形成しており、ヨーロッパで見られた資本主義化による社会階級の問題が徐々に頭角を現し始めていたと考えられる。

■フーリエ主義アソシエーション

シャルル・フーリエの思想

フーリエは神の存在を認め、既存の社会構造（経済、政治、社会システム）が神の意図した個人の情念を妨げ、人類の世界的な調和の実現を不可能なものにしているとした。一方、この打開策としては極めて世俗的で、社会へと適合する個人を育成する既存のシステムを破壊し、社会を個人の情念に適合させることを理想とした。このような思想はアメリカ人によって調整され、「アソシエーション」として導入された。

フーリエの試みからみるアメリカの精神

資本主義社会のより健全なかたちを達成しようとしたフーリエ思想から宗教的要素を極度に引き出したアソシエーションが、オーウェン思想に比べるとはるかに長く持続したことから、アメリカ精神の根底には未だに宗教的理想が存在していたことがわかる。当時のアメリカ社会に見られた農本思想は、宗教的な社会から資本主義的な社会へと急激に転換しようとした反動によって生じたと考えられる。

■ベラミーのナショナリズム『顧みれば』

エドワード・ベラミーの思想

- 産業の完全な国営化
- 性別や能力に依存しない経済的平等
- 徐々な改革で、革命の起こらない平和な変化
- 全社会階級にとって魅力的となる国営化

ベラミーの思想からみるアメリカの精神

『顧みれば』で描かれた社会を表層的にしか理解せず、ベラミーの理想社会像を、「古き良き時代」の牧歌的な生活への回帰を拒否し、完全に共産主義社会と化した大都市として捉えることが、昨今の研究の結論としては主流である。しかし、実際は、第二次産業革命の最中で急激な資本主義化が社会の階級差を広げる中、経済的民主主義無しにして政治的民主主義が成り立たないことの表明であり、民主主義

を掲げた独立戦争の記憶が鮮明に残る時代への精神的な回帰を求め、当時のアメリカ精神の象徴なのであることがわかった。

3-3. アメリカ産業革命 + 3-4. シカゴ コロンブス万国博覧会

第一次産業革命の象徴であるニューヨーク万博から、南北戦争以前のアメリカ産業は農本思想の民主主義に則り、機械化された農業が支配的であったことがわかった。NY万博は他国へアメリカの発展した技術を展覧するのではなく、国内の人々に、民主主義文化が可能にしたアメリカの農産業と自国の成長の可能性を認識させる効果をもたらした。しかし、南北戦争によってアメリカの産業革命は一旦断絶する。そして、北軍が勝利したことによって結ばれた条約は、中央政府による統一的な国民経済を成立させた。これは大企業の成長を促し、政治経済共に集権化を進めた。こうしてアメリカは資本主義社会へと完全に移行し、第二次産業革命が開始したことがわかった。

第二次産業革命を象徴するシカゴ万博からは、アメリカが「帝国」と化し、世界へと拡大する精神と、アメリカの大都市空間の形成に多大な影響を与えた「総合都市計画」の発生を確認し、産業革命によってアメリカの空間がさらに統一されていったことが明らかになった。

3-5. 小結

本章において、19世紀の初頭にはまだアメリカは宗教中心の社会から農本主義社会へと転換期にあり、資本主義の思想は受け入れられなかった背景、農本が支配する社会へと完全に移行した19世紀半ばには、徐々に大都市の発展を可能にする基盤を構築しつつあったこと、そして、19世紀末には、アメリカが建国当初から掲げた「民主主義」の概念は政治に留まらず、社会全体にその管轄を広げていたことが明らかになった。アメリカ社会にも完全に浸透した資本主義に対する反応は、アメリカ特有の「デモクラシー精神」に則ったものであった。

また、第一次産業革命を経て崩れ始めた「農村」と「都市」の均衡は、南北戦争と第二次産業革命によって「都市」側に傾き、資本主義の浸透を許した。南北戦争までは、農本思想的な民主主義の影響により、産業の発展も農業に傾いていたが、戦後には、フロンティアを失ったアメリカのさらなる空間の拡張方法として、海外へと照準を合わせたアメリカ帝国時代と、建築の高層化によって開拓され始めた縦のフロンティアによる大都市の時代が同時並行的に到来したことが確認できた。

第4章 世界都市（コスモポリス）の誕生

4-5. 小結

本章では、アメリカにおけるメロポリスの成長を追い、大都市空間の形成史を確認した。アメリカの大都市には、開拓地の急激な開発行為から定着したグリッド式の地割によって、建築行為を行うことができる敷地の面積に制限がかけられていたという特徴が見られた。この土地の制限は、急成長する大企業の権力を象徴する商業施設にとつて、グリッド内の1マスという限られたフロンティアの消滅を招いた。そこで残された手段は、それぞれの大都市において存在した「実験地」で洗練された新たな都市空間を導入し、さらに、1マスの敷地を縦に伸ばすという、ユートピア的フロンティア増殖方法を生み出すことであった。こうして縦へと敷地を伸ばすことで誕生した摩天楼は、その増殖の際限を知らず、遂には様々な機能を付加することによって「商業施設」という枠組を超越する。摩天楼の成長によって、都市の中に複数の都市を内在する大都市はメロポリスへと成長し、アメリカ独自の大都市空間の形成が完了したことが確認できた。さらには、このような大都市の巨大化に加え、国内の資源は全てこれらの大都市に集中し国が凝集されたことにより、アメリカは草の根民主主義の形態から帝國的官僚政治の形態へと移行する。アメリカ帝国の時代は戦争を重ねる毎に促進され、遂には国境を越境した世界都市（コスモポリス）が誕生したのである。

第5章 考察：《神権＝民主＝寡頭》アメリカ史における空間形成様式

5-2. 帝国と米国：連邦主義と草の根民主主義の精神

大都市空間を生んだ「アメリカらしさ」を明らかにするため、まずはアメリカと大英帝国の領土拡大を比較した。帝国は中核から周辺に成熟した文明を輸出するに過ぎず、被支配社会の内部には介入しないが、アメリカの領土拡大は単線的であり、完全に未開の地へと入植し、領土を拡大する度に原始レベルまで回帰した自身の文明を再構築するということがわかった。（図2,3）

この特徴を踏まえると、第3章のユートピア思想からも、19世紀まではアメリカが帝國的な空間拡大を忌避しており、特有の空間形成文化が浸透していたが、19世紀末を境にアメリカ自身が帝國的な空間を展開したことがわかった。この転換は、連邦主義的な権力の「都市」への凝集と、草の根民主主義的な「農村」の増殖との均衡が崩れたことに起因すると考察し、アメリカの特異性は、連邦主義と草の根民主主義の共存と、フロンティアがこの関係に与えた影響にあるとした。



図2. 帝国の領土拡大



図3. アメリカの領土拡大

5-3. テンニースの純粋社会学から説くアメリカの精神と社会の枠組み

5-2の結果から、考察を進めるには「都市」と「農村」の対立について理解し、アメリカの各発展段階において、どちらの空間が支配的であったのか明らかにする必要があると考えた。しかし、本論の分析からでは、「都市」と「農村」どちらも、アメリカ史を通して形成されており、経済的な側面以外では、各時代でどちらの社会システムが優勢であったのか判断できなかった。このため、それぞれの性質を、テンニースが提唱した「ゲメインシャフト」および「ゲゼルシャフト」の概念と照らし合わせて分析した。

各章で扱ったアメリカの空間と精神を、テンニースの概念を用いて再検討すると、独立戦争までの社会は極めて「農村」的であったが、独立戦争を境に、「農村」の性質が優勢でありながらも、徐々にその枠組みが解体され、南北戦争を境に完全に「都市」が「農村」を搾取する社会へと転換し、世界大戦頃には帝國的なアメリカ社会と大都市空間が完成していたことがわかった。

	植民地時代	共和国時代	帝国時代
	1607 - 1775	1783 - 1861	1865 - 1941
政治形態	欧州諸王国の支配	州政府へ分権	中央政府へ集権
優勢な政治理念	キリスト教	草の根民主主義	連邦主義
優勢な経済理念		重農主義	資本主義
主な産業	農業 貿易業	農業 製造業	商業 製造業
有力な国民	開拓者 宗教家	開拓者 農民	資産家
経済対立	「農村」＝「都市」	「農村」≥「都市」	「農村」≪「都市」
社会性質	ゲメインシャフト	ゲメインシャフト▶ゲゼルシャフト	ゲゼルシャフト
フロンティア	神聖化	開拓	消滅
社会形態	《神権制》	《民主制》	《寡頭制》

図4. 各戦間期の特徴表

5-4. 独立戦争・南北戦争・世界大戦の戦間期におけるアメリカ

5-3で判明したように、独立戦争・南北戦争・世界大戦はアメリカの社会や空間を形成する過程において、極めて重要な転機となっていたことがわかった。このため、これらの戦間期をその性質の違いから、《植民地時代》、《共和国時代》、そして《帝国時代》と称し、各時代に支配的であった精神・政治理念・思想・建築の傾向を考察し、図4の表にまとめた。

植民地時代においては、政治や経済の理念は基本的にキリスト教の理念に従った。産業としては農業と貿易業が主とされており、「農業」と「都市」がほぼ同一の存在として共存していたことがわかる。また、キリスト教の信条に則ってフロンティアを神聖化したことは重要である。この時代の空間形成には宗教が支配的であったことは本論を通して確認でき、《神権制》の社会が構築されていた。

共和国時代を特徴付けるのは、「分散」と「拡大」である。政治は民主主義に則って分権され、産業も各地で展開した「農村」での農業と製造業が主となった。このため、経済活動の動力となった「農村」に「都市」が依存するようになった。また、植民地時代に神聖化されたキリスト教の「フロンティア神話」は世俗化されながらも、好機の象徴として開拓が進められた。開拓者や農民で構成される一般市民が国の礎である《民主制》の社会が構築されていたと言えるであろう。

帝国時代は、共和国時代に分散して展開した文明、経済活動、権力を連邦主義と資本主義によって「都市」へと凝集する時代であった。資本主義化に伴って商業や製造業が主になり「都市」による「農村」の支配関係が形成された。大都市へと成長した「都市」において、中央政府が政治を、大企業が経済を独占する《寡頭制》の社会が構築されたのである。

5-5. 《神権＝民主＝寡頭》

アメリカの特異性は、5-4で明らかにした《神権制》《民主制》《寡頭制》が300年で急転換していったことにある。この歴史の凝縮が、これらの社会形態ないしは空間形成様式が相互に関係し合い、アメリカの大都市という一つの空間の形成を可能にしたのである。

《神権制》の空間形成様式は、他の2つほど可視化された結果をもたらしていない。しかし、この様式はアメリカの空間形成において重要であるフロンティアという概念の神聖化と、《民主制》の空間形成様式の導入を可能にしたことが明らかになった。《民主制》の空間形成様式は、前時代に形成された「フロンティア神話」を世俗化しながらも追従し、アメリカ領土の急激な拡大をもたらした。その過程において、フロンティア前線の至る所で新たな「農村」を形成し、アメリカの資本を蓄え始めた。さらに、《民主制》の基本概念である草の根民主主義は、平等主義的な思想から、

アメリカ中にグリッド式の地割りを流布し、大都市空間形成のための基盤を調えたのである。こうしてアメリカ全体に広がった資本と権力は、《寡頭制》の空間形成様式によって一挙に、《民主制》の基盤に立つ大都市へと吸い上げられ、結果として大都市空間は縦へと伸長した。以上の考察は図5としてまとめた。

世界へと伝播した現代の大都市空間は、300年という国史としては比較的短い期間に凝縮された発展をみたアメリカにおいて、《神権》《民主》《寡頭》という空間形成様式が《神権＝民主＝寡頭》という三位一体の相互関係を持ったことによって形成されたのである。

第6章 結論

本研究を通して、政治経済的な繁栄よりもまずキリスト教の理想を追求した社会の空間形成が独立を経て、その性質をある程度保持しつつも農本主義による空間が形成されたことがわかった。これは、ヨーロッパの資本主義的な先進国に追いつくために、資本の蓄積が必要であったため、キリスト教の思想から、まずは農業による国の成長が理想とされたのである。こうすることで着々と「農村」に蓄えられた資本は、アメリカが十分に成長した19世紀末を期に一挙に「都市」へと凝集されることで大都市空間が発展した。

上の結果をもたらしたアメリカの特異性を考察するにおいて、アメリカの空間形成には草の根民主主義と連邦主義の共存が成立しており、「農村」と「都市」の対立が重要であった。さらに、アメリカ史を通して、独立戦争、南北戦争、そして世界大戦を境に、社会の性質が変化したことが見られたため、これらの戦間期で支配的であった精神から、《神権制》《民主制》《寡頭制》という、空間形成に作用した様式を提唱した。これらの空間形成様式は、各時代において断絶した性質の空間を形成したのではなく、一連の空間形成として相互に作用し合うことで大都市空間をもたらされたとした。

主な参考文献

●ヘレン・ロズナウ著、理想都市研究会訳『理想都市 その建築的展開』（1974、鹿島出版会）
●Lewis, Michael『City of Refuge: Separatists and Utopian Town Planning』（2016、Princeton University Press）
●Mumford, Lewis『The City in History』（1966、1 ed. 1961、Pelican Books）
●Oved, Yaacov『Two Hundred Years of American Communes』（2007、Transaction Publishers）
●入子文子『アメリカの理想都市』（2006、関西大学出版部）
●ラム・コールハース著、鈴木圭介訳『錯乱のニューヨーク』（1999、筑摩書房）
●Abbott, Carl『Frontiers and Sections: Cities and Regions in American Growth』（1985、The Johns Hopkins University Press）
●長谷川章「アメリカ田園都市とビュウリタニズム 一千年王国思想からテクノロジカル・ユートピアへ」（2019 東京造形大学）
●柄谷行人『世界史の構造（岩波現代文庫版）』（3 ed. 2016（1 ed. 2015）、岩波書店）
●ジョン・A・ピーターソン；兼田敏之 訳『アメリカ都市計画の誕生』（2011、鹿島出版会）
●トーマス・ファン・レーウエン；三宅理一 訳；木下壽子 訳『摩天楼とアメリカの欲望 ―バピロンを夢見たニューヨーク―』（2006、工作舎）
●ルイス・マンフォード；生田勉 訳『都市の文化』（1974、鹿島出版会） など

図版出典

図1～5. 筆者作成

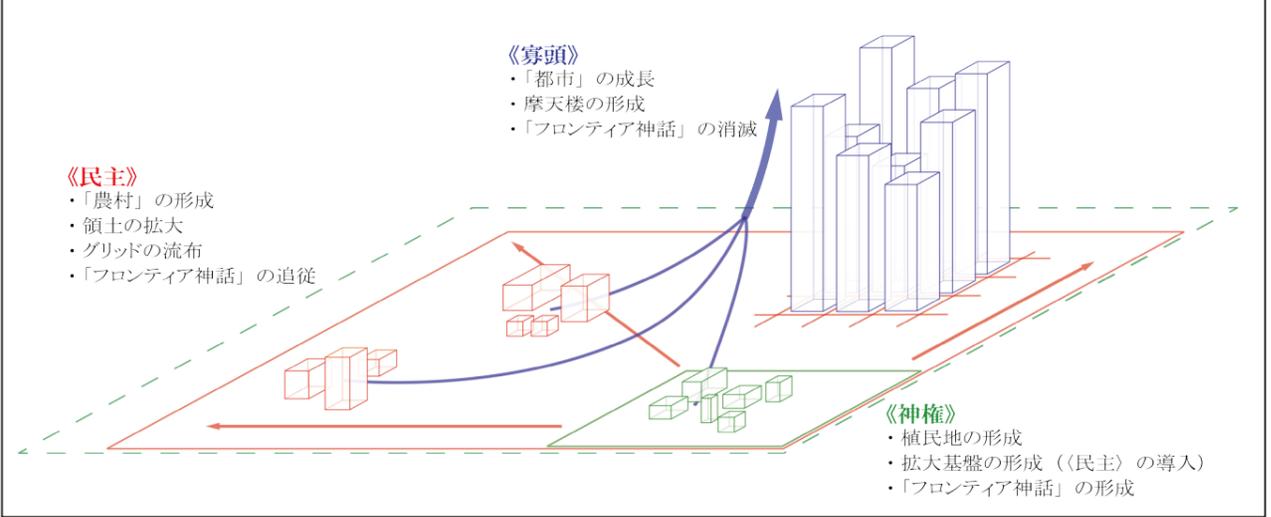


図5. アメリカ空間形成様式　まとめ